

はじめに

著者	浅野 幸穂
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 http://www.ide.go.jp
シリーズタイトル	アジア現代史シリーズ
シリーズ番号	2
雑誌名	フィリピン：マルコスからアキノへ
ページ	1-2
発行年	1991
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00018222

はじめに

フィリピン現代史の最大の問題は、マルコス時代をどう理解するか、にある。

それは、マルコス大統領の政権担当期間が二〇年余（一九六五年二月～八六年二月）と、以前の共和国の全歴史（四六年七月四日独立）を優に上回る長期政権であったということからくるだけではない。彼の支配が、それまで連続性の強かったフィリピンの政治、経済、社会の制度、その運営方法に大きな変更をもたらすものであったからである。とりわけ取組んだ事業は、成否は別にして、独立後のフィリピンの国家建設や経済開発が直面していながら手がつけられなかった基本的課題に向けられていた。現に、マルコス時代に劇的に終止符を打って登場したアキノ政権にしても、「マルコスの影」のもとで同じ課題との苦闘が続けている。

したがってマルコスのような存在がいかにしてフィリピンの政治舞台に登場しなせに退場を迫られたか、何をめざし何につまずいたか、マルコスの出現で何が変わり何が残されたか、の解明はフィリピン現代史を解く鍵となる。

ところがこれまでの研究の多くでは、多かれ少なかれ、マルコスの出現により議会民主主義や言論報道の自由の伝統が一举にくつがえり、フィリピンの民主主義が圧殺された、あるいは、彼自身が永久政権（世襲の君主制樹立を夢みたとする人々さえいる）の野心を満足させ、巨大な私財を蓄積した、という側面にのみ理解の力点がおかれている。

しかし、マルコスの存在はそれだけにとどまるであろうか。そのような理解では、かえって彼を、フィリピンの伝統を一举に打ち破る超能力を持つ希代の巨人に祭り上げてしまうことになるのではないか。また、東南アジア諸国とその政治文化や社会的伝統を共有するフィリピンをいたずらに特殊な存在とすることにならないであろうか。同国が、マルコス時代後半の破綻によって経済開発が挫折してそこから立ち直りに苦闘し、政治的昏迷から抜け出せないで「ASEANのお荷物」の様相を呈していることは事実であるにしても。

著者はここで、たまたまマルコス政権成立と前後してフィリピン情勢の動向分析の作業にたずさわることになった立場を活かして、いわば等身大のマルコス像を浮き出させることができるようなフィリピン現代史を描きたい、と考える。